

全紙パネルに伸ばすときの注意点

一次審査通過作品を「全紙マットパネル」に伸ばすときは、特に「マットの内寸」に気をつけて！ …という話

一次審査を通過した作品は、二次審査のために「全紙パネル」に作成し直すことになっています。このとき作成する全紙パネル作品のトリミング（＝画像の周囲はどこまでを入れるか）や色調などは、一次審査に提出したA4プリントと大きく異なるものにならないようにしなければなりません。これは実施要項にも記載しています。

しかし、場合によっては、出来上がった全紙パネルが一次審査時のA4プリントとかけ離れたものになってしまうことがあります。そうならないために、全紙パネルを作成する際に気をつけていただきたいことがあります。

1. マットパネルの「マットの内寸」について

マットパネルは、パネルの上に写真プリントを貼り、その上から「マット」と呼ばれる厚紙製の枠を貼って完成させます。マットはカタカナの「口の字」形をしていて、中に長方形の「窓」が開いています。この窓の内寸は写真よりも少し小さく開けられているため、完成したマットパネルでは、写真のうち「窓」の内側の部分だけが表示されることになります。



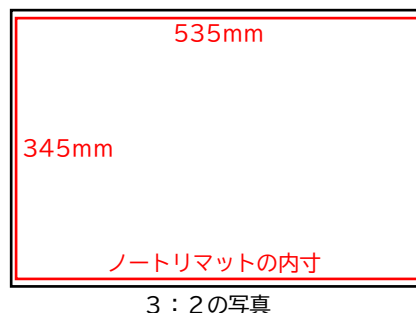
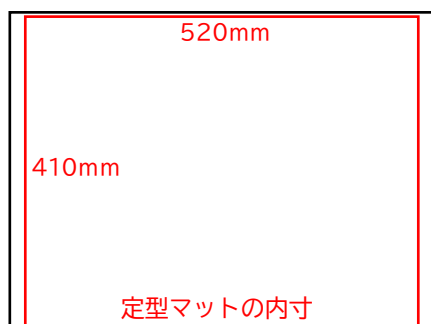
市販の全紙マットパネルの場合、「定型」と「ノートリ」という、マットの内寸が異なる2種類が用意されています。内寸は、定型が「長辺520mm×短辺410mm」、ノートリが「長辺535mm×短辺345mm」です。

デジタルカメラの撮影画像の縦横比は、多くの場合「4：3」か「3：2」のどちらかです。「4：3」の写真は「定型」を、「3：2」の写真は「ノートリ」を使えば、写真のほぼ全部を「窓」の中に収めることができます。

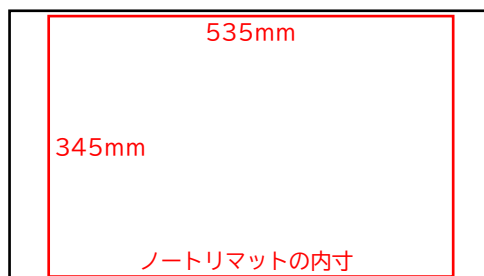
	マットの内寸とその比（長辺：短辺）		そのマットを用いる写真
定 型	520×410mm	約 3.80：3	4：3の写真（コンパクトデジカメやマイクロフォーサーズ）
ノートリ	535×345mm	約 3：1.94	3：2の写真（多くのデジタル一眼カメラ）

ただし、4：3の写真に「定型」マットを組み合わせる場合でも、マット内寸の方が長辺の比が少しだけ短いため、写真の長辺方向（図では左右方向）が少し切られてしまうことになります。さらに、パネル作成の作業上の余裕を持たせるために写真はマット内寸よりも少しだけ大きくプリントされるので、その分、周囲が少しだけ切られてしまいます。

3：2の写真に「ノートリ」マットを組み合わせる場合も同様で、写真の周囲が少しずつ切られます。



なお、スマートフォンを「16：9」に設定して撮影した写真の場合は、長辺方向がかなり大きく切られてしまいます（右図）。したがって、全紙パネルまで伸ばすことを考えた場合は、スマートフォンのカメラの設定は「4：3」にしておくのが無難です。詳しくは、「写真部Tips その1『スマホのカメラの縦横比は4：3で』」をご覧ください。



2. トリミング指定の実際

例えば、下のような4：3の写真があったとします。被写体は画面いっぱいに写っていて、周囲に余裕がありません。

この写真を「定型」のマットパネルにする場合、特に指定がなければ、図Aのようにトリミングされます。赤線はマット内寸（横：縦の比は520：410）を示しています。左右は男の子も女の子も少しずつ切れ、上下方向では男の子の足の先が切られています。これで「特に問題はない」ということであれば、特別な指定をする必要はありません。



画像データ（4：3）



A 均等にトリミング

しかし、この写真を撮った作者が「男の子の右手のグーは絶対必要だ！」と考えるのであれば、図Bのように指定すべきです。逆に、「いや、女の子の髪の毛が大事だ」と思うなら、図Cのように指定すれば良いのです。



B 右手のグーを重視



C 髪の毛を重視

Bを選んだとして、さらに「足の先は絶対に切れて欲しくない！」ということであれば、図B-1のように指定すべきですし、「時計が示す時刻が大事なんです！」というなら、図B-2のように指定すれば、意図を伝えることができます。



B-1 グーと足先を重視



B-2 グーと時計を重視

では、仮に「B-1」のトリミングを希望するとして、具体的にはどのように指定すれば良いかというと、文章で伝えるか、図で示すかです。

文章であれば、例えば「左の男の子の右手のグーと、足の先は切れないようにお願いします」というように書けば良いと思います。

図で示すには、一次通過作品を薄めにコピーしたり、同じ画像データを出力（白黒で構いません）し直したりして、その上にマット内寸を表す枠を描けば良いのです。手描きでもいいですが、画像データをWordなどに貼り付けて、図形の挿入で「縦：横＝41：50」の長方形を作って比率を維持したままサイズを調整し、画像データの上に重ねる方法が楽だと思います。

なお、「男の子の右手も、女の子の髪の毛も、足の先も、時計も、全部残したい」という場合は、右の図Dのように、マットの窓の中に白枠が見える形で小さめにプリントしてもらえませんか。過去に県内で出品された作品では見た記憶がありませんが、特に規定違反ではありません（令和4年度の全国大会の展示では、そのような作品が3例ほど見られました）。



D 全部残す

3. 色調について

写真専門部として全紙パネルの作成先として斡旋している業者では、見本として預かった一次審査時のA4プリントにできるだけ近い形で全紙プリントを作成するようにしています。しかし前項で説明した通り、見本のA4プリントと全紙パネルのトリミングを完全に一致させることはできません。それだけでなく、色調（＝明るさや色合い）も見本通りにならない場合があります。

多くの高校では、一次審査に出品するA4プリントを「SDカードをプリンターに挿して直接出力」するか、「一般的な（＝カラーマッチングをしていない）Windowsマシンから、OSに標準搭載されているソフトを使って出力」していて、お使いのプリンターも多くの場合は一般的な普及タイプだと思います。そのような環境で出力された「素人プリント」（失礼な表現ですが）と、より適切な環境でプロの手によって出力されたプリントでは、単に画質が向上するだけでなく、画面の明るさや色合いが多少は変わってしまうのは致し方ありません。

また、一次審査に出品したA4プリントが、通常よりも特に明るかったり、暗かったり、色合いが青っぽかったりする写真の場合、それらが補正されて「より綺麗な（＝無難な）」全紙プリントに仕上がる場合があります（審査用の全紙プリントに限らず、写真をお店プリントする際は、多かれ少なかれ起こることです）。しかし、せっかく綺麗に仕上がっても、二次審査の会場で「この作品は、一次審査のA4プリントではもっと暗かったけど、逆にそこが個性的で良かったのになあ…」というような評価を受けることがたまにあるのです。

そこで、「あえて白っぽく撮りました」「あえて暗くなるように撮りました」「不自然に見えるかも知れないけど、あえてこの色調でプリントしました」というような作品の場合は、全紙プリントの作成を依頼する際にそれらの特性ができるだけ反映されるように、具体的な指示をしておくが無難です。

いかがだったでしょうか？ もしかしたら「ずいぶん面倒だなあ」と思われたかも知れません。しかし、デジタル写真が普及する前、各校の暗室で黑白フィルムから写真を現像していた頃は、全紙に引き延ばす作業も、パネル貼り作業も、すべて自分たちでやっていました。大変ではありましたが、それが「自分の作品をつくる」ということでした。

現在は、パネル作成を業者に任せてしまう場合がほとんどですが、作者の意図を最後まで作品に反映させるためにも、ぜひ、適切な「指示」をしていただきたいと思います。

2022年11月作成

福岡県高等学校芸術・文化連盟 写真専門部